＜シマフクロウ四方山話＞

5

瀧口 政満さんを悼む

北海道シマフクロウの会副会長
村田 正敏

「円空」を抱いた瀧口さんと
（阿寒湖畔、2014 年 9 月）

瀧口政満さんが亡くなって、半年になります。今年４月４日、阿寒湖畔で愛犬を連れて散歩中に倒れ、翌５日、釧路市内の病院で急性肺炎のため帰らぬ人となりました。76 歳。知らせを受けた時には、信じられない気持ちと掛け替えのない彫刻家を失った、との強い衝撃を受けました。

瀧口さんの彫るシマフクロウは、森の王者の風格を感じさせる独特の作品です。ハルニレの埋もれ木を使い、木目を生かして羽毛の柔らかさまで表現する見事なものです。

「北海道シマフクロウ通信」第３号で、横内龍三会長は「10 年前、阿寒湖畔のホテル鶴雅で彫刻家・瀧口政満氏の一群の鳥の作品に出会いました。鋭い眼光など鳥の木彫に強烈な印象を受けたのです。そして、その鳥がシマフクロウという名の鳥であることを知ったのです。これが、私のシマフクロウとの初めての出会いでした」と書かれております。横内さんが瀧口さんの作品を見なければ、シマフクロウにこれほど関心を持つことがなく、この会が生まれていなかったのかもしれません。

私が最後に瀧口さんにお会いしたのは、昨年 11 月、釧路市文化賞の授賞式の席上でした。釧路市教委を通して案内をいただき、瀧口さんのお顔を見たいとの思いだけで出席したのです。瀧口さんは「受賞を励みに制作に力を入れたい」としっかりとした口調で挨拶をされ、私に「なかなか良い木が見つからない。作品のイメージがわく木を探さなければ」と語られました。さらに、後継者を育てるために木彫学校のような施設を作る夢もお持ちのようでした。

その後、テレビの番組で阿寒湖畔の森で「イメージがわく木」を懸命に探している様子を拝見し、これからも感動的な作品が観られると心待ちしていた矢先の訃報でした。

瀧口さんが散歩に連れていた犬は、「円空」という名前です。湖畔をうろついていた野良犬だったそうです。瀧口さんがそれを哀れんで仕事場で育て、江戸時代に１２万体ともいわれる仏像を彫った僧、円空の名前をつけた、と伺いました。

瀧口さんの魂のこもった作品は、鶴雅グループの宿泊施設などで観ることができますが、あの優しい眼差しの名彫刻家の顔を二度と見ることができないことは本当に残念でなりません。

心からご冥福をお祈りします。

事務局便り

●当会顧問の山本純郎さんが皆さんの質問にお答えします。

普段気になっているシマフクロウのこと、何でも結構ですので事務局までお寄せください。お待ちしております。

●入会を募集しています。引続き当会の趣旨にご賛同いただける個人の皆様の入会を募集しております。ホームページからも入会の手続きが可能となっておりますのでご覧ください。

北海道シマフクロウの会　事務局　〒060-8640 札幌市中央区大通西3丁目11番地 北洋ビル6階　北海道二十一世紀総合研究所 内
（担当：米谷・山内・北口）　TEL 011-231-8681　FAX 011-231-8683　URL:hokkaido-shimafukurou.org

平成 29年10月25 日発行／発行：北海道シマフクロウの会／印刷：株式会社ほくでんアソシエ／誌面デザイン・イラスト・DTP：中島祥子

山折り

北海道シマフクロウ通信

北海道シマフクロウの会　会報　第16号

写真：山本純郎

山折り

講演会

札幌市の取り組み

５月１２日収録　要旨

札幌市は、平成20年６月施行の生物多様性基本法に基づき「生物多様性さっぽろビジョン」を平成25年３月に策定しました。

これは「北の生き物と人が輝くまち“さっぽろ”」という理念のもと、札幌の自然環境の保全と生物多様性に配慮したライフスタイルの実践を目標とするものです。

札幌市は、原生的な自然環境から都市部の人為的な環境まで多様な生態系を持っています。大きく「山地ゾーン」、「山麓ゾーン」、「市街地ゾーン」、「低地ゾーン」と分けられるその環境は河川や緑地でつながり、特に各ゾーンをつなぐ豊平川は、生活に複数の環境が必要な生き物の重要な生息・生育基盤となっています。

また市域面積の６割以上が森林であり、円山・藻岩山などの原生的な生態系から公園・農地等の人為的な生態系には多種多様な生態系が見られ、約6,000種類に及ぶ動植物の存在が記録されています。

そして、このような環境を守るため、柱となる４つの施策が設定されました。その４つとは、生物多様性に対する理解を深める（理解する）、生物多様性の保全に皆で取り組む（協働する）、生物多様性を守り育て、将来に伝えていく（継承する）、生物多様性の持続可能な利用を進める（活用する）というものです。

札幌市では、これらの施策推進のため、絵本コンテスト・生き物つながりクイズラリー・札幌版レッドリストの作成・市民参加型の生き物調査・実践ハンドブックの作成・出前講座など様々な取り組みを行ってきました。

このような取り組みを通じて、市街地においては緑や川の流れがまちを包み、河川においては変化に富んだ生態系や良好な水環境が確保され、美しい風景や人と生き物の豊かな交流が生み出されるという札幌市の「望ましい姿」を実現する手助けができればと思います。

また、円山動物園の野生復帰ゾーンでは、クックとレインという番のシマフクロウの繁殖を目指し、将来的には繁殖個体を野生に返す事に北海道の動物園が連携して取り組んでおります。シマフクロウは北海道の自然を代表する存在でもあり、これらの取組みが、札幌市に留まらず、北海道全体の生物多様性の保全にも寄与する事ができれば幸いです。

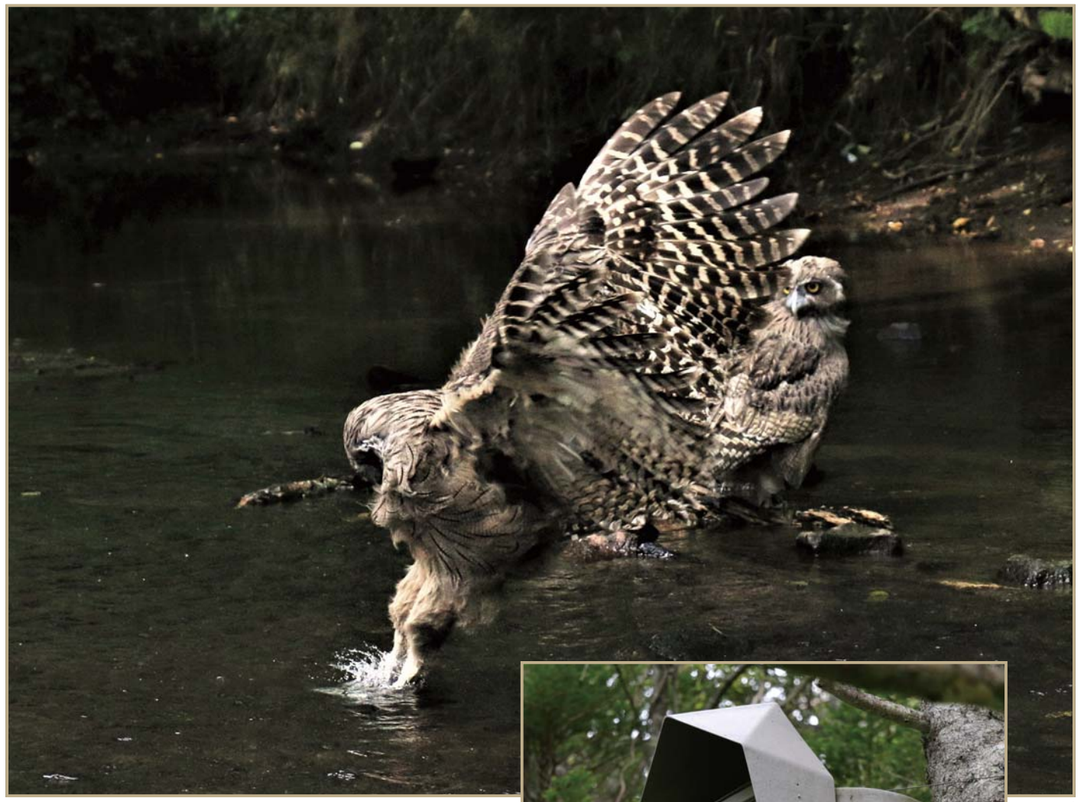
トピック

生物多様性保全の取り組みにかかわる情報発信について、北海道庁のホームページに紹介されました。

シマフクロウの生態

シマフクロウの巣

シマフクロウ保護・研究家　**山本純郎**



1

2

3

1　若鳥にハンティングの見本をしめす雄親
2　屋根付きの巣箱
3　樹洞利用の巣
　右下はトビの古巣

鳥の巣には大きく分けて２タイプある。一つは鳥が自ら作るものと、もう一つはあるものを利用するタイプである。フクロウ類は後者であるが、コミミズクは草を倒しただけの簡単な巣を作り、ワシミミズクは自分が吐き出したペレットをほぐして座座にしていることもある。

シマフクロウは主に自然に出来た樹洞で産卵している。これまで確認された樹洞は図にあるようなタイプで、穴の位置は覗けるくらい低いものから10mを超える高いものまである。このような樹洞のある営巣木を彼らが選ぶときの基準はなんだろうか。

魚を主食とするシマフクロウにとって河川との位置関係がポイントになる。川からあまり離れていなくて、尚かつ接近しすぎてないことが重要だ。近すぎると、そこは氾濫原となっていることが多く、もし巣立ちの時に氾濫が起きると、雛が溺れてしまう。そう考えると最適なのは河岸段丘上かその斜面ということになる。これまでに確認された営巣木の位置は川から２m～1000mと広範囲にある。営巣木捜しはシマフクロウにとって中々困難な仕事だ。樹洞が出来るような広葉樹の大木は伐採などで少なくなっているからだ。

そこで登場するのが、巣箱だ。巣箱の形状は円柱型で内径60cm高さ90cm、入り口は30cm四方で、雪が入りにくいように出窓型になっている。中には木くずを敷き詰めている。またテンが入らないように屋根付きのタイプもある。試行錯誤の結果、樹木のあまり密生していないやや開けた場所にある木を選び、高さは７m～10mの位置に取り付けている。巣の入り口は陽の入る方向に向けたり、動物の侵入を防ぐのに幹に鉄板を巻いたり工夫を重ねてきた。巣箱の利用率は高く、近年の数の増加に貢献していると言えるだろう。